

化粧櫓：千姫の個人的な空間

この優雅な設備の櫓を完成させるお金は、二代目の徳川将軍の娘であり本多忠刻(1596－1626)の妻である千姫(1597－1666)の持参金だったと言われている。千姫はその櫓を着替えの部屋、そして神道の神である天神への祈りを捧げるときの休息の場所として使った。その天神の天満宮神社は城の向かい側にある丘に位置していて、その櫓と西の丸回廊から見ることができる。

櫓の上の階には3つの和室があり、杉の木でできた天井、そして内側の壁は紙で作られた装飾の枠組みで飾られている。それは安土桃山時代(1568－1600)、すなわち16世紀の最後の2、30年で芸術が栄えた時代の住まいの装飾の一形式だった。

化粧櫓は姫路城の他の居住区域がどのように見えたであろうかという貴重な手がかりを提供している。化粧櫓と西の丸回廊を除いて、姫路の現存する建物は純粹に軍隊の構造である。支配する一族が自分たちの時代のほとんどを過ごした邸宅は失われてしまっている。